



朝来市生野町との連携事業（自治体・地域住民と連携した新たな自治体史編纂や地域歴史博物館形成事業）

河野，未央

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 4(平成17年度事業報告書):71-74

(Issue Date)

2006-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002227>



朝来市生野町との連携事業

はじめに

朝来市生野町との連携事業は、2003年11月に旧兵庫県朝来郡生野町（以下、旧生野町）教育委員会から神戸大学文学部地域連携センターに生野書院（以下、書院）保管の古文書の再整理の依頼を受けたことをきっかけとしてスタートした。

上記活動に先駆けて、旧生野町に対しては工学部足立研究室においても、近代化建築遺産の保存・活用に向けて旧生野町で独自に取り組みを行っていたが、このような工学部における事業とともに地域連携センターの事業をさらに推進・発展させるべく2005年3月23日に旧生野町と神戸大学は協定を結んだ。同年4月1日以降、旧生野町は朝来郡朝来町・和田山町・山東町と合併して朝来市となったが、この協定は新市に引き継がれ、センターとしても本格的に事業を展開させてゆくことになった。

なお、同事業は神戸大学における現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」事業（以下、現代GP）の一環でもある。

本年度事業については、昨年度事業における成果を土台として、書院文書の保存・公開・活用に向け、実践的な取り組みを行った。その主な内容は「銀谷祭り」における特別展示、初心者向け古文書講座、大学院生による古文書合宿である。以下、順に述べるが、古文書合宿に関しては本報告書において別に述べており、重複を避けるためここでは概略のみを記す。

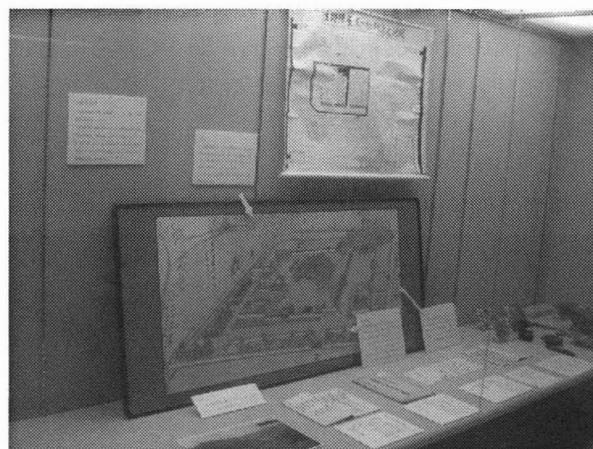
（1）「銀谷祭り」における特別展示

2005年10月2日（日）に生野町で開催された「銀谷祭り」において「もうひとつの生野～江戸時代の生野をたずねて～」と題した特別展示を行った（於生野書院）。昨年度整理事業の成果の還元を目的とした、書院所蔵文書についての展示である。

当該事業が現代GPの一環であることから、展示に向けては準備段階より大学院生に参加を呼び

かけ、協働して作業にあたった。最も心を砕いたのは、来館された方々が展示内容についてより関心・理解を深めるにはどうすればよいのか、という点であり、そのための新たな試みもいくつか行った。以下、具体的に述べていきたい。

①生野書院展示室側面スペース（ガラスケース内）の展示



主に生野代官所支配に関する史料展示を行った。鉾山支配よりはむしろ生野町や周辺村々の人々の暮らしとの関わりがわかる史料を選定した。また明治・大正・昭和と同位置から生野町の全景を写した写真も展示し、生野町の景観の連続性や変化を示した。なお、事前の史料調査やキャプション・パネル作成は、大学院生とともにを行った。

②生野書院展示室中央スペースでの展示

ここでは近世後期から近代への移り変わりの時期における代官所関係の史料を展示したが、同時に古文書を身近に感じてもらうための新たな試みも行った。

同スペースについては、床に毛氈を引き、史料・キャプションを並べただけのものである。しかし、直に眼にすることにより、ガラスケース越しでは伝わりにくい文書・モノ資料の質感などが感じられるのではないかと考え、あえて設えた。さらに当日は解説員をつけ、場合によっては実際

に文書に触れていただきながら、その横で直接展示解説を行った。



「古文書に触れるのは初めてだ」と展示してある帳面の頁を慎重に繰る方、書いてある内容についてひとつひとつ質問される方など様々であったが、概ね好評であった。

③生野書院和室を利用した絵図の展示



書院には、明治初年の生野町を描いた大絵図が所蔵されている。同絵図は以前常設展示に置かれており、ガラスケース越しで細かな描きこみまで十分見ることが叶わなかった。さらにその後、劣化を防ぐため常設展示から外しており、現在実

物は展示されていない。よって当日は実物を間近で見ただけのように、書院の和室に絵図を広げ、随時観覧とした。また、絵図を広げるという一連の作業自体も「展示」の一環として見ていただいた。これが第二に行った試みである。

当日は大学院生二人の協力のもと、絵図を広げるリハーサルを行ったうえで、本番に臨んだ。絵図の解説については、生野書院職員の小椋俊司氏に担当していただいた。

なお、絵図展示の状況は、以下に紹介する大学院生の感想の中で触れてあるため、そちらを参照いただきたい。

■参加記

(文学研究科 修士1回 H.Y)

「銀谷まつり」に伴う史料展示のため、準備の段階と当日の2回、生野を訪れた。準備の段階で訪れた時にはとても静かだった町が、当日とても賑わっていた。やはり、お祭りの集客力はすごい、と思った。町の雰囲気、活気に満ちあふれていた。

私が携わったのは、主にビラ配りと絵地図展示の補助作業である。ビラを配っていると、興味を示して「どこでやっているの?」と尋ねて下さる人、「何だろう。」という表情でビラを受け取って行かれる人、忙しそうに去っていく人、他のものに興味があって素通りの人と、いろいろな人がおられた。とにかく、ビラを渡すだけではなく、「こういうことをやっています。」という説明を添えるよう心がけた。絵地図展示については、まず絵地図を広げるところから始まった。展示を見に来た方々は、熱心に見て行かれる方が多く、生野書院の方の説明に聞き入るだけでなく、いろいろなやりとりがあった。お祭りは、このような展示にとってもいい機会だな、という印象を持つと共に、持続的に、よりたくさんの市民の方々に、歴史に興味を持ってもらうには、さらに何ができるだろう、ということ、今後自分も考えていきたいと感じた。私にも、考える良い機会になったと思う。

(文学研究科 修士1回 N.Y)

生野書院が所蔵している史料を公開し、実際に触れてもらったり、間近で眺めてもらう。それが銀谷祭での企画で、私はそのお手伝いとして現場を

のぞかせていただいた。

銀谷祭前日に、当日公開するために用意されていた、明治前期頃の生野銀山の絵図を見せていただいた。この絵図は、以前ガラスケースに入れて展示されていたらしいが、手元で細部の色づかみや服装・小道具まで見ていると、当時の住人や外国人居住者の様子など、全体像からは見えてこない情報が読みとれる。

当日公開した時も、地元年配の型を中心に大勢見に来られたが、絵図とじっくり対面しながら自分の記憶にある地元の姿と対照しておられた。絵図の説明は生野書院の方がされていたが、地元の方々の記憶と絵図の「付け合わせ」が始まると、まるで学習会の様だった。中には絵図が生野書院に所蔵されていること自体はじめて知った方もいて、「こんな絵が生野書院にあったんか」という感嘆の声がもれていた。

「地域で史料を生かす」「地域の人に活用してもらおう」と授業で学んでいたが、生野で絵図から地元のことを学ぶ地元の方の姿を見て、はじめてそれを目の当たりにできた。今後も生野では、あまり知られていない貴重資料を公開し、認知してもらおうことを目指すそうだ。銀谷祭のように、史料と人をつなぐ機会になる場を模索することが鍵になっていくのではないだろうか。

参加記にうかがえるように、「銀谷祭り」の展示企画については、現代GPで行われた授業の「実践」として認識し、そのような視角から展示に取り組んだという点で、昨年度古文書合宿に引き続き同事業プログラムとして一定の成果を得ることができた。しかしその一方で担当者の準備不足もあって、集客や補助作業に終始させてしまい、大学院生が当該企画に主体性をもって取り組む場を設けることができなかった。そして、キャプション・パネルの作成、展示レイアウト、来館者の導線の想定など、展示技術に関しても改善すべき点が多く残った。

また同日工学部もサテライトにおいて企画展示を行っていたが、このような工学部の取り組みと連携が持てなかったことも反省点のひとつである。

もっとも後者については、2006年1月19日（木）に工学部・文学部の学生による「銀谷祭

り」展示についての報告会を兼ねた交流会を実施（於工学部環境棟）、今後の事業展開や工・文コラボレーションのあり方についても意見交換する場をもつことができた。来年度事業についてはこの場で交わされた意見をできる限り活かすことができるよう取り組んでゆきたいと思う。

（2）初心者向け古文書講座

昨年度行った古文書合宿でも、試験的に古文書講座を実施し、多くの参加者を得た。その際の参加者の一部から以下のような意見を聞いた。

「生野町では、町民の方々が毎月1回、独自に古文書学習会を開催している。学習会は長年継続して行われており、参加者の古文書読解のレベルもかなり高い。そうした参加者のレベルを反映して、テキストも非常に難易度が高いものが用いられているが、これから古文書を学ぼうとする初心者には難解すぎるため、参加してもついていけなくなり、参加を断念するケースが多い。」

その一方で、古文書学習会参加者の高齢化が進んでおり、学習会の中でも裾野をどうやって広げるかという議論がなされているという意見も聞いていた。

さしあたって両者の橋渡しを目的とし、初心者向けの古文書講座を4回にわたって行った。日程は以下の通りである。

第1回：2006年1月29日（日）

第2回：2006年2月19日（日）

第3回：2006年3月5日（日）

第4回：2006年3月19日（日）

（いずれも13:00～15:10、場所は生野書院）

受講者は各回およそ15名前後であるが、第2回目は古文書合宿における企画と同時開催としたため、25名近くの受講者を得た。講師はいずれも河野が担当した。

ところで、同講座の実施に際して、町民の方からクレームをいただいた。古文書学習会のメンバーに対して事前の説明が何も無く「住民無視」に等しい、という厳しいものであった。かかるクレームについては、何度かメールのやりとりの後、直接話し合いの場をもち、今後は大学・行政・町民間で相互に情報の共有をはかり、可能であれば町民の方にも企画段階から参加してもらとうと

いうことでとりあえずの了解をいただいた。

古文書講座の最終回にアンケート調査を実施した。アンケートでは今後も初心者向け古文書講座の継続を望む声が多かった。また歴史講座の開催の要望もあった。さらに少数ではあるが、古文書整理を行いたい、あるいは研究報告をしたいなど、主体的に企画に関わりたいという声もあった。

こうした町民の方々の声を尊重し、来年度は企画そのものを地域連携センターが全て行うのではなく、企画提案を行うなど、町民の方々独自の取り組みを支援できる体制に徐々にシフトしていきたいと考える。(大学から講師を派遣する古文書「講座」から発展させ、古文書「学習会」とするなど。)

(3) 大学院生による古文書合宿

日時：2006年2月18・19日(土・日)

場所：生野書院

18日は終日生野書院未整理文書の作業を行った。19日は生野書院の和室で古文書講座とともに生野書院文書の研究報告会(報告者：添田仁氏[神戸大学文化科学研究科院生])を行った。

おわりに

本年度事業は、次々と新しい試みに挑戦し、今後朝来市生野町との連携を継続して進めてゆくうえで様々な可能性を見出したことは評価しうる点である。

しかし、それぞれの企画を実現させることに精一杯で、いずれの企画についても準備不足であった点は否めない。配慮すべき点を見落としていたというのも、こうした準備不足と関わる問題である。先述した町民の方への事前説明ができていなかったのもそのひとつであると言える。来年度「企画提案」型へとシフトしてゆく際にはさらにその点についての十分な配慮が必要とされよう。

もうひとつの反省点は、いずれの企画も書院古文書の保存・公開・活用のための実践的取り組みであったということを、町民の方々・大学院生に十分に伝えきれなかった点である。来年度は趣旨説明を行うのはもちろんのこと、企画準備段階から町民の方々あるいは学生に加わってもらうほか、議論の場を設けるなどして、共通理解・認識をもって企画に取り組んでゆけるようにしたい。